

4 透析時の抜針予防保護具の作製 ―認知症患者への安全・安楽な透析看護を目指して―

○木下 大輔, 三尾 恵子 (I H I 播磨病院)

I. はじめに

近年、高齢化社会に伴い透析患者においても高齢者が占める割合が増加の一途をたどっている。当透析センターでも認知症患者の行動障害により抜針事故が発生している。予防対策としてシーネの使用やシャント肢をシートで保護するという方法で抜針事故防止に努めてきた。しかし、使用していくなかで操作がしにくい、固定が不十分、穿刺部位の観察がしにくい等の問題点が生じた。そこで患者にとって安全・安楽で、看護師が操作しやすく観察しやすい抜針予防保護具（以下、保護具とする）を考案・作製したので、その有用性について報告する。

II. 研究方法

1. 研究期間：平成 21 年 7 月 1 日～12 月 25 日
2. 研究対象：研究期間中、コミュニケーションが可能な患者 15 名および透析センタースタッフ 7 名（看護師 5 名、臨床工学技士 2 名）
3. 方法
 - 1) 従来、使用していたシーネの問題点を抽出し、新たに保護具 A を作製。
 - 2) スタッフで保護具 A をプレテストし、安全面・安楽面を患者用アンケートにより評価する。
 - 3) 上記患者用アンケート結果をもとに、保護具 A に改良を加え保護具 B を作製。
 - 4) スタッフで保護具 B をプレテストし、患者用アンケートにより評価する。
 - 5) 対象患者に保護具 B を透析中装着してもらい患者用アンケートにて評価する。看護師へも安全面・作業効率面をスタッフ用アンケートにて評価する。
4. 倫理的配慮：研究協力者に対して、研究の目的と方法、研究協力の任意性と撤回の自由、個人情報保護を文章に基づいて説明し、同意を得た。

III. 結果

スタッフ・患者に対する患者用アンケート結果は共にシャント肢が安定していたという意見が大半を占めた。安定していたことにより抜針の危険性は低くなり、安心して透析を受けることが出来たという意見が多かった。しかし、腕の太い患者、スタッフには保護具がサイズの小さく、装着中、窮屈感や痛みを訴えた者もいた。スタッフに対するスタッフ用アンケートでは容易に穿刺部が観察できたという意見が多かった。

IV. 結論

雨どいという側壁のあるものでシャント肢全体を覆い固定したことで安定感が生まれ患者の身体的・精神的ストレスの軽減につながったと考えられる。しかし、腕が太い場合は痛みを生じ、細い場合は安定性・固定力が弱くなるといった問題点が生じた。これは雨どいの横幅が調整できないことや保護具の装着基準が曖昧であることが原因であったと考える。今後の課題として装着基準の設定や方法を検討していくことが必要である。この研究を通して看護師は患者に安全で安楽な療養環境を提供する義務があることを改めて認識することができた。